

真剣で私に恋しなさい！  
～零～

伯楽星

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

秋山悠理―幼くして両親を亡くした彼は武の総本山、川神院にて養父と共に暮らしていた。そんな中で弟妹分を通じて訪れた風間ファミリーとの出会い。

それこそが彼にとつての分水嶺

『護りたいモノが増えた、だから強くなりたい』

川神院師範代にして悠理の養父 立花信

北陸の剣聖十一段 黛大成

九鬼家従者部隊序列零番 ヒューム・ヘルシング

数々の実力者たちに鍛えられる事四年、川神に舞い戻った悠理に今再び運命の分水嶺が迫る――

※

初投稿作品につき文体がおかしかったり、キャラの口調があやしかったり、話の運びが曖昧でちぐはぐになる可能性もあります・・・が！生暖かい目でとことどころ目こぼししながら見て頂けたら幸いです。

# 目次

第一話	出会い	1
第二話	五十年後の約束	15
第三話	新たなる輪	23
第四話	決意	32
第五話	半年後	39
第六話	発露	51
第七話	帰還	58
第八話	Sの序章	69
第九話	東西交流戦〜前編〜	80
第十話	東西交流戦〜後編〜	88

## 第一話 出会い

人生とは様々なもので構成されている

その中でも『出会い』と『別れ』は誰にも等しく訪れるものであり

だからこそ意味を持つと私は考える

今思うならば・・・

『彼ら』との『出会い』が私にとって一番大事な思い出だと思う

—2002年・夏—川神院中庭—

side あきやま 秋山悠理 ゆうり

俺は両親の顔を知らない、聞く話によれば父は俺が生まれて少し後に、母は俺を産んですぐに亡くなったと言う。真相は知らないし別にこの先知る必要も無いと思う、俺にとつては今は重要だからだ。

「せいっ!!はあっ!!」

俺の名は秋山悠理、ここは武術の総本山川神院、そして俺は川神流の門下生。

「オー、頑張ってるねエ悠理」

「おはようございます、ルー師範代」

七三分けに緑のジャージのルー・イー、川神院の師範代で生真面目を絵に書いたような性格で『心』の強さに重きを置く。やや技のネーミングセンスの悪さが目立つが基本尊敬出来る。

「お？朝も早くから元気だなあ」

「釈迦堂さんはもう少しシャキツとしたらどうですか？」

ボサボサの頭に無精ひげの釈迦堂刑部しゃかどう せきやうぶ、同じく師範代でこちらは不真面目を絵に書いたような性格であり『体』、つまり力そのものに重きを置いておりルー師範代とは基本仲が良いが武術に関してだけは反目している。典型的な中年オツサンだが基本尊敬出来る。

「ん、すっかり鍛錬しているみたいだな」

「おはようオヤジ」

腰ほどまである長い髪を束ね季節外れのマフラーを着用する立花信たちばな しん、同じく師範代で『技』に重きを置く俺の師匠でもあり保護者でもある人物だ。小学生の俺に酒を進めようとするほどの酒好きだが基本尊敬出来る。

「おはよう、頑張つとるのお悠理」

「おはようございませす、総代」

人の良さそうな笑みを浮かべた老人、この人こそこの川神院の総代である川神鉄心かわかみ てっしん、

現役最強と言われており武を志す者たちの目指すべき場所でもある人物。煩惱まみれだが基本尊敬出来る。

「すまんがモモを起こしてきてくれんかのう」

「まだ起きないんですか」

「うむ、一応起こしはしたんだがのー」

「分かりました」

いつもの事だ、とため息をつきながら建物の中へと歩き出すのだ。

side 立花信

「ところデ、悠理の方はどうだい？」

「そーいやあそれが気になるんだよなあ、お前秘密主義だからあいつの修行を他には見せねえだろ？」

ふと、ルーと刑部からそんな事を問われた。俺は秘密主義と言うよりは一人の弟子を時間をかけて熟成させたいんだよねえ。

「まだまだ発展途上だ、だがまあ……」

『まあ？』

「まだ底が見えんからな、どつかで二、三年ぐらい集中的に育成したいもんだが……」

そうなると学校とか行けなくなるわけでよ、結構キツイ事させるつもりだから本人の意思も重要だしなあ」

正直言うなら悠理はまだまだ強くなれると思う、だがそのためには修行以外のほぼ全てを捨てる期間がほしい。がまだ悠理も四年生だしこれから友達も増えてくる、保護者としては今は小学生らしく過ごしてほしいとも思うわけで・・・ん？

「なんだ、ニヤニヤして」

「いやーねエ？」

「だな・・・」

なんだよ、気色悪い面しやがって・・・

「ちゃんと父親していると思ってるネ」

「まあ最初はどうかと思ってるけどよ、最近特にオヤジが板についてきたんじゃねえか？」

そうか？まあそれはそれで嬉しいと言えば嬉しいのだが・・・悠理がそう思ってくれるなら特に、だけどな。

---

side 秋山悠理

さて、総代に言われてからたどり着いた部屋。とりあえずはその襖を叩いてみる。



「百代！起きてるか!!」

反応が無い、再度叩いてみるが同じだ。本来ならば年頃の女子の部屋に無断で入るのは気が引けるが……

「入るぞ百代」

襖を開けて入れれば寝穢く寝ている黒髪の少女の姿が目に入る。川神百代<sup>かわかみ ももよ</sup>、総代の孫娘で次期総代候補でもある才能の塊。

「……揺らして起きるはずも無いだろうし……ここは」

枕元にしやがみこんで、耳元で一言呟く。

「起きなきや前髪をストレートにするぞ」

「うわあっ!!?やめろよお!!」

次の瞬間に跳ね起きる百代、しかしまあどんだけ嫌がつてるんだよこいつは。

「起きたか、鍛錬が始まるぞ。俺はオヤジだから良いがお前今日は総代と組手だろう?遅れたら説教で組手がなくなるぞ」

「っ!!すぐ行く!!」

「そう伝えとく」

その言葉を聞けば直ぐに背を向け部屋を出る、と直後に寝巻きを脱ぐ音が聞こえる。全く、俺も一応年頃の男の子なわけで……意識していないのだろうか、信頼されて

いるのだろうかと疑問にも思うわけだが。

—昼頃—

いつものように午前中の鍛錬を済ませた俺はいつものように縁側で昼寝をしようと寝転がっていた……のだが

「悠理、いるかい？」

「?ルー師範代」

呼ばれる声に身を起こせばルー師範代の姿が。

「君を訪ねて人が来ているヨ」

「忠勝!一子!……と誰だ？」

正門までくればそこにいたのは二人の弟妹分と見知らぬ男子。

「兄貴、実はちよつと用事があつてな……」

こちらの少々目つきが悪いのが源忠勝、かつて俺と同じ孤児院で育つた弟分だ。

「おにいちゃん……」

ポニーテールの少ししよんぼりした表情なのが岡本一子、こちらも同じ孤児院で育つた妹分……なのだが何時もは天真爛漫な一子が沈んでいるのが気にかかる。

「お初にお目にかかる、直江大和と申します」

なんだろう、いろんな意味で重大な病気を患っていきそうな口調で話してきたぞこの男子。というか良く近くまで来て見ればクラスメイトじゃないか。

「直江は同じクラスだったな？まあ俺の顔ぐらいは知ってると思うけど秋山悠理だ。改めて宜しく」

とりあえず直江と握手を交わす。

「で？本題に入ってくれ」

「ああ、実は……」

忠勝の説明を聞くなれば今現在、忠勝と一子、直江が所属している仲良しグループがあるらしいのだがつい先日、上級生のグループに何時も遊んでいた原っぱを数の暴力で奪われたのだそう。それぐらいならば良くある事だったがそこから先を聞くにつれ自分の表情が歪んでいくのが分かった。

当初遊び場を奪い返す事を考えた直江たちは策を用いて上手くあしらう寸前まで行ったのだがあと少しと言うところで一子を人質にとられ更にリーダー格の男子は耳にコンパスを突き刺されたのだという。

「で？俺を？」

だが今は耐えよう、ここで怒ったところで相手はいないし一子を怯えさせるだけだ。

「俺もそれは考えたんだがな、如何せんあつちも数が多いからこつちも手数揃えようつ

て話になつてな」

もつともな話だ、聞けば一子ともう一人非戦闘要員がいるようだ。なら護る担当と攻める担当が一人ずつほしいわけだ。となればなんとなく予想がつく。

「百代を呼んでくれば良いんだな？ つてか手間省いて説得もしてくるよ」

「いいのか？」

「今の話は俺も気に食わん、任せろ」

——  
確かこの時間なら百代は……いたいた。

「百代！ちよつとこつち来い!!」

「ん？どうした悠理」

厨房で桃をつまみ食いしていた百代を呼び寄せる。

「ちよつと話を聞いてくれないか」

それから説明をした、俺の弟妹分とその友人が理不尽にひどい目にあつていふと言う事、それでこちらに助けを求めて来たと言う事を。

「確かに、気に食わないな」

百代は普段色々といい加減な性格をしているがとにもかくにも曲がった事が大嫌いなやつだ、特に今回みたいなのは許せなかつただろう。

「良いだろう、案内しろ」

「つつーわけだ、俺と百代が手え貸してやる」

「すまねえな兄貴」

「ありがとうお兄ちゃん！」

「気にするな弟妹よ、俺は兄だからな」

とりあえず忠勝と一子の頭を撫でているとあちらでは百代にトレーディングカードのレアカードを献上する直江の姿が。

『じゃあお前は今から私の舎弟だ！いいな!?!』

『はいっ！姉さん!』

舎弟契約とは、まあ良いだろう。川神院内で唯一の年下である俺がこのとおりタメ口だから弟分と言う存在に憧れたんだろう。

『ゆうびきーりげんまん、嘘ついたら腕の中で捌り殺す！ゆうび切った!!』

『……え?』

捌り殺すってお前……直江、強く生きるんだ。

『ちなみに私の舎弟と言う事は悠理の舎弟でもある！あいつの事は兄さんと呼ぶんだ  
!』

おかしいな、気がついたら巻き込まれた。

——一週間後——

例の上級生連中をしめる前に忠勝や一子が所属していると言う『風間ファミリー』のメンバーと顔合わせをする事にした。

「俺は自由な風！風間翔一だ!!」

バンドナを巻いて一子に負けず劣らずな元気さを見せるリーダーの風間翔一、話によるならば彼がコンパスを刺されたらしいが今は気にしている様子はない。

「俺様は島津岳人だ、ナイスガイだろう?」

小学生にしては筋骨隆々な島津岳人、なんでだろう出会ったばかりなのにこいつの将来が心配になってきた。

「師岡卓也もろおかたくやです、宜しく」

おとなしめな師岡卓也、うん。何か光るものが垣間見えるが今はそれがなんなのかは分からない。

「で……あいつらか」

「ああ、そうなんだ兄さん」

それでもはや直江の中では俺の呼び方は兄さんで固定らしい、まあもう気にしない事にしよう。ともあれ今は例の連中を遠目に見ている状態だ。数は20人近くいるだろ

うか……まあ百代もいるしどうとでも出来るだろう。

「んじや真つ向から行こう、百代は奥に突っ込んで思うままに暴れて大将首を取れ、果敢に突っ込んできたら俺が迎撃する」

「ああ、それで良いぞ……」

「ほんじゃま、参るぜ皆の衆」

俺が先頭を切つて歩き始めると二番目に百代がついてくる。その後ろから忠勝と風間、直江、島津が一子と師岡の二人を護るように進む、前回の反省もあり人質に取られやすい二人を護る事にしたのだろう……それならこちらもそれなりに動ける。

「百代、一発目は俺が行く。後は最低限あいつらだけを護るからカチコミは任せろ」

「ああ任せろ」

「手加減はしろよ？話を聞くかぎりじゃ多分喧嘩慣れはしてないだろうからな」

「分かつてる、ジジイにどやされたくないしな」

チラリと後ろを見れば、忠勝が静かに頷く。「こつちは任せろ」と眼が語っている、全く信頼出来る弟分を持ったものだ。

「なんだお前ら、風間たちじゃねーかよ」

「二人増えたぐらいで勝てると思つてんのか？ああ!？」

「今度は耳じゃなくて舌とか面白そうじゃね？」

そんな事を言いながら先ずは三人ほどが俺の方へと歩み寄ってくる、しかしまあ俺が川神院で修行しているとと言う事を差し引いてもアリアリとわかるぐらい喧嘩は素人だ。きつと数に任せた真似しかしてこなかったんだろうな、個々の実力だけなら風間ファミリーの連中の方が圧倒的に上だ。

「大丈夫だ、二人増えたんじゃねえ」

「あ？」

「お前らの相手は．．．俺たち二人『だけ』だ!!」

無警戒な顔面に先ずはストレートを叩き込む。当然、警戒していなかったたので鼻つつらに命中し鼻血で顔を真っ赤にしながらゴロゴロと転がっている。

「てめー!!」

「よくもヤスコを!!」

一緒に進んできていた二人が同時にかかってくる、が．．．遅い。何時も百代の手をさせられている俺からすればハエよりも遅い。先ずは右側から蹴りを入れようとしている奴の膝を前蹴りで止め、その間に左側の奴の拳を掴んでそのまま引きずり倒す。

「行け!!百代!!」

「ああ!!五分で沈めてくる!!」



そして右側の奴のみぞおちに拳を叩き込んだあとに倒れ込んでいた奴の背中に全体重を乗せた肘を叩き込む。痛みのみならず、あまり気絶した二人を放置し百代に合図を出すそのまま俺は後退し風間ファミリーと合流する。

「後はあいつに任せておけ、何とでもなる」

その言葉に黙って頷いた風間ファミリーのメンバー、そして言葉通りに百代が五分ほどで全員を沈めてきた。ちなみに前情報で風間の耳にコンパスを刺した奴に関しては他の奴らがパンチ、或いはキックで一発だったのに対し顎へのアッパー、こめかみへのフック、ボディへのストレート、すねへのローキック、金的への前蹴りと言うフルコース五連撃で沈めていた……俺にしか見えなかっただろうが。

「さて、これでしばらくは大丈夫だろうが……」

そう、しばらくはだ。喉元過ぎれば熱さを忘れると言う言葉のように、時間が経って俺と百代が彼らの仲間では無いとわかれば再び危険にさらされるかも知れない……どうしようかと考えていた時だった。

「ねえねえお兄ちゃん」

声をかけてきたのは一子だ、まるで子犬のような瞳で見ている。

「どうした一子?」

「お兄ちゃんと……百代先輩も私たちと一緒に遊ぼうよ」

一子の言葉に、あちらのメンツが顔を見合わせる。そりやあ今後の事を考えて心配していた俺にとつては渡りに船だが・・・

「悠理！モモ先輩！二人とも俺たちの仲間になってくれよ!!」

風間の言葉、他のメンバーの表情を見れば本気で誘ってきているのだとわかる。だから俺たちはこう答える。

『ああ！宜しく!!』

## 第二話 五十年後の約束

—2002年8月—

side 秋山悠理

俺と百代が風間ファミリーに加わって二ヶ月ほどが経過した、最初の頃にちよつとした事件はあったものの今ではすっかり仲良し八人組として周囲からも認識されている。参入時のあの事件だがちよつとだけ捻れて周囲に伝わったらしく『風間ファミリーのうち二人が化物』と言う認識をされている、やや不本意だ……化物なのは百代だけで俺は一般より少し上ぐらいだ。

「ねえねえ、この草……この間より大きくなってないかしら？」

何時ものように原っぱで遊んでいると、一子が草……と言うよりはあれは花ではなかるうか？つぼみではあるが。まあともかくその植物を見てそんな事を言い出した。

「そういえばそうだな、以前より……うん、かなり伸びた」

「ああ……そう言えばそうだな」

皆も少しばかり印象にあったのだろう、口々につぶやきながら頷いている。

「ある日」

不意に岳人が口を開いた。

「ある日ワン子の姿が消えていた、すると次の日にこの植物がワン子の身長分伸びていった」

「いやー!!?」

「テメエゴラア!!何妹怖がらせてくれてんだアアン!?!」

「すいませんした!!」

岳人の言葉に怖がった一子を見て俺が胸ぐら掴んでキレると岳人が即謝ってきた。全く、大事な妹である一子を怖がらせるなんて何てことをするんだ……。泣き顔も可愛かったけど。

「ある日岳人の姿が消えていた、すると次の日この植物のてっぺんに岳人の顔が……」

「ギャー!!気持ち悪いわ!!」

「気色悪い事言うんじゃないやねえ風間!!」

「グロイよ!!」

「……」

翔一の言葉に皆がキモがるとかなり分かり易く凹んでいるのがわかる。

「しかしなんの植物だろうな」

「ジジイか立花さんなら分かるんじゃないか?」

成程、鉄心老人さんとオヤジ博識な馬鹿なら分かるかも知れないな。

「じゃあ呼ぶか、皆耳塞いどけ」

俺の言葉におとなしく全員が耳をふさいだのを確認すれば百代と二人揃って息を吸い込む、そして……

「ボケはじめのブルセラじじい!!」

「制服大好きエロオヤジ!!」

俺と百代が同時に叫ぶと……

「こりゃモモ!!お前良い度胸しとるの!!」

「お前んな事大声で叫ぶなよ!?!俺が色々疑われるじゃねえか!!」

「なんなの川神院って……」

俺と百代が悪口を叫んだ事で本当に現れた鉄心さんとオヤジの姿に卓也がドン引きしながらツツコンでる。

「実は二人を呼んだのには理由があつて……」

とりあえず二人の叫びを無視しながらこの植物について聞こうと思つて呼び出した旨を伝えてみる。

「んー……これって竜舌蘭じゃね?」

「ふむ、確かに……竜舌蘭じゃのう」

『竜舌蘭?』

鉄心さんとオヤジが口を揃えた事でこちらが皆揃って首をかしげる。

「センチュリープラントつつつてな、何年かに一度しか咲かない花の事なんだが……この竜舌蘭がまさにそれでな」

「うむ、確かこの花は五十年に一度のはず……ワシも昔ここで見た覚えがあるから……明後日ぐらいには咲くかのう」

なんのかんのと言いながら去っていく二人を見送るように手を振ってから、後ろを振り返ってみれば何故か皆がサークル組んで相談中。

「五十年に一度か……いいなそれ!!」

「だよな、良い記念つつーか」

「じゃあ咲いたら集合写真とつて……」

どうやらこの竜舌蘭を前に写真を撮る計画らしい、しかし……確か明後日は台風が直撃するはずだ。無事に咲けば良いのだが……

「ん?」

今一瞬……原っぱの入口に誰かいたような……

—翌々日—

見事に台風直撃とはな、昨日の感じだと明日には咲きそうだったがこれじゃ……

「悠理ー、お友達から電話だヨー」

「うーっす」

ルー師範代の言葉に受話器を受け取る。

『ああ兄さんか!?!』

電話のむこうからはやや慌て気味の太和の声が。

「どうした」

『実はキャップたちが竜舌蘭を護るために原っぱに……』

「……は?」

「まてまて、この暴風雨の中を?確かに皆あの竜舌蘭に特別な何かを感じたのは否定しない、俺もそう思った。だけどあまりにも危険すぎる。」

『止めるのは無理そうだったから兄さんと姉さんに来てもらおうと思って……』

「分かった、他には誰が」

『既に岳人とモロ、ワン子が……だからこのあと直ぐに源さんに連絡するつもり』

「分かった、俺と百代もすぐ向かう」

受話器をおけば、その足はまっすぐに百代の部屋へと向かう。

「無茶しやがって……」

ものの数秒で百代を引きずり出した俺は、暴風雨などものともせず原っぱへと通じる道を駆け、本来10分かかかる道のりをわずか三分で踏破していた。

「二人共遅いぞう!!」

「やかましい!! まあ良い説教は後だ、どうせやる事やらにや帰るつもりもねーんだろ?」  
その場にいた翔一、大和、一子、岳人、卓也、忠勝を順に見る、全員が静かに、それでいて力強く頷くのを見れば先頭を切つて歩き出す。

「俺が陣頭指揮を取る、皆俺の指示に従つて動いてくれ!」

「おう! リーダーとして命じるぜ! この場の指揮はユウ兄に預ける!!」

「よし、んじやあ基本二人一組で行こう。翔一と岳人、大和と忠勝、百代はモロと……

あの子守つてやれ」

『?』

原っぱに到着してから、視界の隅に映っていた少女、痩せていて少し薄汚れた印象のある子だ。

「お前椎名じゃん!」

「なんでこんなところに……」

椎名京、クラスが違うので詳細は知らないが確かいじめを受けていた子だ。

「あの、皆がこの花咲くの楽しみにしていたのを、見ていたから……それで……」



「今は人での多い方が助かるしな、頼んだぞ百代。一子は俺と来い、んで翔一と岳人で竜舌蘭を支えろ！大和と忠勝はロープの用意、百代チームで支柱を立てろ！俺と一子で固定する！分かったな!!」

『おーう!!』

あのあと、なんとか全員無事に家まで送り返す事には成功したのだが当然の如く鉄心さんとルー師範代から俺と百代は説教を喰らった（オヤジと釈迦堂さんは笑ってた）が不思議と達成感があつた。

その翌日、台風一過の青空の下に風間ファミリーは集合していた。

「いやー、咲いたな」

感慨深そうに呟くのは大和だ、それに続くように口々に感動の言葉を述べる中……  
「思ったより普通だな」

我らがリーダーは全く空気を読まず、皆が思っているも口にしていなかった事を口にしやがった。

「言うなよ!?!」

「思っただけだよ!!」

岳人とモロがツツコミで連携してしまったじゃないか。

「ほらほら、とつとと写真撮るぞガキども!!」

と、カメラ片手にオヤジが皆を急かすとわらわらと寄り集まってポジション取りとポーズ決めに入る。

「……」

こちらを見つめる視線を感じれば、原っぱの入口に椎名の姿だ。

「大和、あの子誘って来い」

「え、俺?」

「兄貴分命令だ、行け」

しぶしぶではあるが椎名をつれに行つた大和。

「なんだ、一人増えたのか? ほらとつとと並べ!!」

騒がしく慌ただしく撮られた写真。

「どうせならよ、次に咲いた時も皆で揃って撮ろうぜ」

「お、いいなそれ!!」

「あのさ、よかつたら君も……」

「……うん」

50年後、そんな遠く先の約束ではあるけども。それでも今この場にいた皆の眼にはその遠い先の光景がハッキリと浮かんでいた。

## 第三話 新たなる輪

—2003年—

side 秋山悠理

季節は巡り春、百代は六年生に、それ以外のメンバーは五年生にあがった頃。ちよつとした変化が風間ファミリーに訪れた。

二人の少女の存在が波紋を呼ぶ。

椎名京……今年大和、岳人のクラスメイトになり今もなおイジメ続けられている少女。大和が最近、少しばかりその事を気にし始めたようだ。オヤジに頼んで少し調べてもらったがどうやら母親の男グセの悪さがかなりのものらしく、それに加えて根暗に見える風貌故にイジメられているらしい。

こゆき小雪……苗字は分からないが近頃原っぱに姿を見せた少女。虐待の痕が見え隠れし百代がこちらの事を気にし始めている。こちらにも調べてもらったのだがこちらは母親からの虐待らしく介入の難しい問題だ、と思うのだが……あの目の百代は意地でも引き下がらないからなあ……

「兄さんはどうしたら良いと思う？」

「なあ悠理、私はどうしたら良い？」

大和と百代からほぼ同時に相談を持ちかけられた俺は、オヤジからの情報を待つて二人を同時に再度呼び出した。

「多分さ、二人共互いに助けたい子がいてどつちか一人だけしかーとか思つて相談してきたろ？」

無言で頷くこの二人、この姉弟は・・・大和は元々小難しい事を考える奴だが百代まで柄に合わずに小難しい事考えやがって・・・

「何のために俺たちがいるんだ？翔一や一子、忠勝、岳人、卓也も併せて八人だ。なら総がかりで二人助けちまえば良いだろ？それに・・・きつとなんやかんやで皆賛成してくれるさ」

結果としてファミリー全員の説得に成功した。まあ岳人が渋つたものの大和の説得(?)により応諾してくれたので今は川神院の俺の部屋で椎名と小雪も呼んで作戦会議中である。

「まあ椎名の方は学校で同じクラスの大和と岳人、それと他クラスに影響力がある翔一とお守り代わりの百代に任せるとして・・・問題は学校違いの小雪か」

椎名の方は特に難しい事は無い、女子からの人気が根強い翔一に学年トップの成績の

大和、同年代でパワー最強の岳人に既に近隣の小中学生の間で『睨まれたらおしまい』と言われている百代が一緒だと知れば最低限イジメは沈静化するだろうし後は当人次第になってくる。

問題なのは学校違いな上に家庭の問題である小雪の事だ、こればかりは俺たち子供が踏み込むには難しく危険な問題だ……が止めてもこいつら首を突っ込むんだろうからせめて俺が制御しなけりやとも思う。

「……モモ先輩」

「大丈夫だぞユツキー、ここにいる皆は私の頼れる仲間なんだ。だからきつといい感じにやっつけてくれるさ」

じーっと百代を見つめる小雪の頭を百代が撫でる。

「ま……人事を尽くして天命を待てと言う言葉もある」

俺はゆっくりと立ち上がる。

「七面倒なのは苦手だ、正攻法で行ってみようか」

ニヤリ、と笑みを浮かべたならば先ずはオヤジのところへと向かって部屋を出る。後をついてくるのは大和と忠勝だ。

「で？正攻法って何をやる気？兄さん」

「家庭の事情だと取れる正攻法って少ねーと思うぞ兄貴」

「ああいうのはな、現場を抑えるのが一番だからな」  
『?』

俺が取った作戦は単純明快、現場を大人たちとともに抑え証拠のある状態で正当な手段を持って小雪を母親の下から救い出そうと言うものだった。ちなみに参加を応諾してくれた大人とは以下の人々だ。

「危険な事をしようとしていたのは褒められた事ではナイ、だが君たちのその心は尊いものダ。私で役に立てるなら力を貸そウ」

真面目で真っ直ぐなルー師範代。

「ま、どうせ暇だしな……」

不真面目だが面倒見が良い釈迦堂さん。

「そういうの大好きだぜ？俺は……」

真っ先に理解を示してくれたオヤジ。

「ま……オジさんもそういうの見過ごせないしね」

忠勝の養父である宇佐美巨人さんも何故かついてきた。代行業と教師の二足わらじらしいのだが少なくとも教師には見えない。

まあこれに俺を加えた五人で現在は小雪の自宅付近で待機中である。師範代三人組

が小雪の気に乱れを感じたら真っ向から力づくで突撃、現場を抑える予定だ。

「……ん、少し気が乱れ始めたネ」

「形部、リング準備しとけ」

「とつくにしているよ、悠理もカチこむ準備しとけよ」

「言われずとも」

「流石は川神院、すんごい荒事慣れしてんのね」

音も立てずにドアの前まで移動した五人は壁に耳を寄せて……一見変質者にしか見えない気もするが

「……!!」

もめている事ぐらいしか分からない、が師範代sは不穏な気を感じ取っているようだ。

「いや!?!」

「アンタさえないなければ!!」

「いやだ!!助け……」

「っ!!」

小雪の、助けを求める声を聞いた瞬間に頭の中が真っ白になっていた。どうやったかは覚えていないが家の中に踏み入った先で頭を抱え込んでいる小雪と、小雪めがけて包

丁を振り下ろす女性の姿。あれがおそらく小雪の母親なんだろう。

「小雪!!」

振り下ろされる包丁を弾くよりも小雪を庇う行動を反射的に取った、実際無理に包丁を弾くよりもそのほうが確実だった。

「っ!!? ああああっ!!」

背中に走る熱い感覚、これが斬られた感覚なんだと理解する前に更に斬りつけられる、女性が何やら叫びながら更に斬り付けようとすが聞こえない。ただ次の瞬間にオヤジたちの声が聞こえてきたのだけは分かった。

『テメエ!!俺の息子に何しやがる!!』

『っ!!釈迦堂!急いで押さえつけるヨ!!』

『分かっているって、落ち着け信!!』

『こいつあ酷え・・・直ぐに救急車だ!』

『ユウリ!!』

「俺は大丈夫だって・・・だから・・・」

そして俺の意識は落ちていく――

次に眼が覚めた時、俺の目に映ったのは真っ白な天井だった。それだけで病院と言う



事は推測がついたが……何故病院に？切られた傷ぐらいならば川神院でも十分に治療可能だろうに。

「眼が、覚めましたか？」

「っ!？」

その声に、一瞬起き上がろうとするが背中に激痛が走る。

「神経などには影響はありませんでしたがそれでも重傷と言うに些かの迷いも無い傷です、ご無理をなさらず」

との声に、やむを得ず顔だけをそちらへと向ける。そこにいたのは少年だ、ハーフなんだろうか……やや日本人離れた整った容姿にどこか澱んだ目を持つ……

「ここは葵紋病院、そして私は葵冬馬あわいとうまと申します」

葵紋病院、川神でも最大規模の病院。そして葵冬馬と名乗ったこの少年はつまり病院長である葵医師の息子と言うことか。

「……俺は」

「秋山悠理君、ですよね」

そしてふと気づく重み、そちらに視線を移すと小雪が俺の寝るベッドに顔をうずめるような形で眠っている。

「休むようには言ったのですけどね、『ユーリが倒れたのはボクのせいだから』と聞いて

くれませんでしたので……やむを得ず私が付き添っていました」

「すまんな、感謝する」

「いえいえ」

訪れる静寂。

「少しだけ、相談に載っていただけますか？」

「俺が？」

「ええ、貴方の付き添いで来ていた川神院の師範代方にも思ったのですが『面倒』『却下』『私よりも悠理の方が良い答えを出せると思うヨ』と断られましたね」

釈迦堂さん、オヤジ、ルー師範代の順番だろうか。しかしルー師範代も俺にそういうのを振ってくるか。

「まあ明確な答えを返せるかは分かんが聞いただけ聞いておこうか」

「では……」

それから冬馬は、包み隠さずに全てを話した。自分の父親が裏で相当あくどい事をしていたと言う事、今日師範代たちが証拠を掴み冬馬の父親と副院長の二人を警察に突き出したと言う事、そして冬馬は目標だと思っていた父親が実際は思っていたのと正反對の存在であり目標を失った自分はどうかしらいいのか悩んでいると言う事らしい。

「成程な、まあ俺もまだ一歳だし小難しい答えは返せんが……」

「ええ、それで十分です」

「んじやあさ、冬馬よ……お前の目指してたのってさ『父親そのもの』か？それとも『今まで見てきた父親の姿』か？」

「！」

「もし『父親そのもの』なら問題外だが……そうでないならお前はまだ先を目指して歩き出す事が出来る」

冬馬が眼を丸くしてから、笑いだした。何かおかしいことでも言ったか俺？

「ありがとうございます、ついでにお願いがあるんですけど……」

「なんだ？」

「私と、もう一人いるんですけどね。貴方たちの輪に加えていただけませんか？」

「おう、まーそこらへんを決めるのは俺たちのリーダーだからな。だから紹介はする、熱意は自力でなんとかしろ」

「はい」

冬馬の目は、いつの間にか晴れやかなものへと変わっていた……

## 第四話 決意

—2004年春—

椎名京、榊原小雪、葵冬馬、井上準いのうえ じゅんの四人が風間ファミリーへと加わって一年以上が経った。小雪の事件のあの後、逮捕された冬馬の父である葵紋病院院長と副院長に代わって葵紋病院の院長になった榊原さかきばら医師が小雪を引き取り、また『確かに親に罪はあつたが子に罪は無い』と冬馬とそのお供で副院長の子でもある井上準をも引き取つて育てる事を宣言し今ではかつての澱んだ目など一度も見せないでいる。

京と小雪はあれから大分変わった、当初はどこか沈んだ雰囲気ではあつたが今ではあの頃の面影など無くすつかり明るくなって……

「大和……好き／＼／」

「お兄ちゃん♪」

時折トラウマが蘇りそうになつていた京を度々抱きしめ撫でて慰めていた大和と学校が違う故に家が同じな冬馬と準以外と中々会えない小雪の寂しさを紛らわすために頻繁に会つていた悠理は凄まじく懐かれ今では京が大和に告白するというプロセスが日常に何故か追加されており、俺は小雪からいつの間にかお兄ちゃん呼ばわりされてい

た、まあ悪い気はしないが。

そんな日常の中、小学校生活も終わると言う頃悠理は一つの決意をしていた。

—川神院—

side 秋山悠理

川神院でも真劍勝負だけに使われる道場がある、そこに俺と鉄心さん、オヤジとルー師範代に釈迦堂さんが集まっていた。

「オヤジ、俺……決心がついた」

「ほお……」

差し向かいなのはオヤジと俺だけ、他の三人は思い思いの場所での話を聞いている。

「護りたいものが増えすぎた、だからこそ今のままじゃいけない」

小雪を助けた頃から、感じていた事だった。あの時もつと自分が強ければ怪我を負わずに済んだんじゃないか、あの時もつと強かったなら……小雪を悲しませる事も無かったしファミリーの皆を、忠勝と一子、二人の弟妹を泣かせないで済んだんじゃないかと思うのだ。

だからこそ……

「俺はもつと強くなりたい！護りたいもの全てを護りきるために！他でも無い……俺

自身のために!!!」

俺の心からの叫びだ、呆れられるだろうか、と言う思いもあるが言い切つてやった。

「ふおふおふお、青春じやのう……」

先ず声をだしたのは鉄心さんだった、まるで孫を見るような慈愛の目で見ている。

「あーあ、つまんねえの。まっすぐなままワガママに歪みやがった」

つまらない、と言う割には楽しいに釈迦堂さんが嗤う。

「うんうん、私は応援するヨ」

そしてこちらも、楽しそうにルー師範代が笑っている。

「悠理」

「はいー!」

そして最後、オヤジだ。

「お前が強くなりてーなら俺はそれを全力でサポートしてやる、そのためには一から鍛え直す……よって生半可な真似はしねー。覚悟決めたな?」

「無論!!」

「よし、なら爺さん!悪いが……」

「分かつておる、中学は休学扱いにしておくから遠慮なくやるが良いぞい」

なんだろう、ものすごい勢いの話が進んでいる。

「お前を三年、いや四年で集中的に鍛える。で俺もついでに鍛え直す」

「はい」

「俺の持てる限りの全てを注ぎ込んで……それこそ百代どころかこの世界の誰よりも強くなるようにしてやる……だから命懸けでついて来い!!」

「応!!」

んでもって小学生生活最後の集会でファミリーの皆にこのことを打ち明けた時、皆の反応は様々だった。

「修行の旅か……楽しそうだなそれ!!」

「ガキんちよだなあ……ま、だからこそか」

「ハハハ!!俺様に全て任せな!!」

「岳人とかも出来るだけ抑えるから、だから安心して行つてきなよ」

「がんばー」

快く送り出す翔一、百代、岳人、卓也、京。

「うええええん。(。・皿。)。」

「……(。皿)グスン」

泣き顔の一子と小雪。

「……本気で行くのか」

「まあ色々と不安だけど……残るメンバーが」

「少し寂しくなりますね」

「お前がいなくなったら誰がモモ先輩抑えんだよ」

若干の難色は示すがそれでも概ね送り出す方面の忠勝、大和、冬馬、準。

「悪いとは思うがな、だが俺も色々考えた結果だ」

百代以外の全員の頭を軽く、順番に撫でながら言う。

「泣きやめワン子にユツキー、お前らだつて自分の道を進み始めたんだろ？ だつたら先に歩き始めたお前たちが送り出さないと」

一子は、半年ほど前に保護者である祖母が亡くなってから川神家に養子として引き取られた。その後川神院に正式に入門し川神院門下生、川神一子として武術家の道を歩み始めた。

小雪はあの事件以来、自分の身を護る何かを身につけたいと色々していたようだ。結果としてルー師範代が簡単な格闘術を伝授している……正式な門下生では無いので技などは教えられていないが今では頭角を現し最近ではルー師範代が正式な入門を勧めているほどだ。

「うん……」



「分かったよ……」

ようやく泣き止んだ二人の頭を撫でる。

「大丈夫だ、絶対俺も戻ってくるから……だから二人ともしっかりと鍛錬してしっかりと学んで、しっかりと成長しろよ」

『うん!!』

よし、二人の元気な返事を聞けたから満足だ。

旅支度を済ませ川神駅へと向かうオヤジと俺、ふと気になり俺はオヤジに問いかけた。

「で?どこ行くんだ?」

「北陸、俺の知り合いにまゆずみ大たいせい成せいつていてな。そいつのところに先ずは一年ぐらい下宿させてもらいなながら基礎鍛錬をしつつ対武器戦闘を学ばせる」

黛大成、確か現代でただ一人剣聖、十一段の名を持つ剣豪。知り合いだったとは……このオヤジは一体どれぐらい人脈が広いんだろうか?

「俺の人脈を使い切ってお前を鍛えてやるからな」

オヤジの背中を見る。今までマジマジと見る事は少なかったが……うん、本当の父親の背は知らないが実際にいたらこういう感じなんだろうなと思う。

新たな出会い、新たな地、これからの期待を寄せながら・・・前へと進む――

## 第五話 半年後

—2004年10月—

side 秋山悠理

劍聖黨大成の下で修行を始め半年が経った。対武器戦闘を学ぶと言う事で訪れていたわけだが大成さんの教えは無手である俺にとつても非常に有用なものが多く、日々が充実していた。と言うのも今現在の鍛錬相手のおかげもあるのだが……

「行くぞ由紀江」

「はい、何時でも」

由紀江、大成さんの娘であり大成さん曰く「遠く無い未来に自分をも追い越す」との事であり実際に手合わせしているとその底の深さが伺い知れる。今はまだ負けるとは思わないが気を抜くと追い抜かれそうな感覚に襲われる事があるほどだ。

「せあっ!!」

「はあーあっ!!」

最近、主に由紀江と組手をする時限定だが手袋を装備するようになった。と言うのも素手で刀を弾き、防ぐだけの技量は今は無いのでそれを補うためのものだ。防刃防弾織

維で出来ており技術さえ磨けば刀を正面から止め、銃弾をも防げる（オヤジ談）との事なのでいずれは出来るようになりたいものだが。

「せいせいせいせいせいっ!!」

「っ！おお！」

しかし由紀江は日増しに剣速が上がっている、今はまだ眼で追いきれているが後二、三年経ったらどうなるかは分からない。俺も負けずに鍛錬せねばと思う……

「そこまで」

その掛け声と共に俺の拳は由紀江の水月を、由紀江の刀は俺の首を撃つ寸前で止められた。

「おうおう、すっかりやっつてるみてーだな」

オヤジと一緒に現れたまさしく武士、な格好をした人こそ剣聖黛大成。普段の立ち居振る舞いからは想像がつかないが相当の強者でオヤジ曰く「大成は俺と同じで普段はおとなしくするの」との事だ……オヤジが大人しい？……まあ気にしないでおう。

「まあな、由紀江に追いつかれないようにするのが精一杯だな」

「いえいえそんな、悠理さんに追いつく私の方が必死で……」

由紀江は、俺と始めてあった頃はかなり人見知りだった。笑顔を出そうとして逆に不

自然になりものすごい睨み顔になるほど不器用だった、が俺が組手ついでに相談にのったりしているうちに少しづつ解消されてきたようだ。と言うのも彼女の妹の話なのが……

「で？二人揃ってどしたい？」

「あー実はな」

オヤジの話を聞くとどうやら川神院からオヤジへの帰還要請が出たらしい、と言うのも数多くいる師範代候補生たちから師範代の要職にある人物が長々と川神院を空けているのはどうなのだ？そのような人物が本当に師範代の地位にふさわしいのか？と言う議題が上がっているらしいのだ。

当初は反論もしようと思っただがあちらの方が正論である以上川神院に戻っておとなしく門下生の指導に精を出すか師範代の座を投げない限りはあちらも収まらない、となれば師範代を辞める気が無い以上戻ると言う選択肢を選んだらしいのだ。

「で？俺は残る期間ずつと……？」

「いや、それも考えたがな……お前のバトルスタイルと黛流じゃ合わないからな……そこで俺の人脈を駆使してとある人物に残る三年半の期間をお願いする事にした」

ならば良い、由紀江や大成さん、最近仲良くなってきたこの辺の子供たちや近所の爺様、婆様と別れるのは寂しいが俺にも目指す場所がある以上仕方の無いことだと思う。

「で？誰に頼んだんだ？」

「それはだな……」

「俺だ、赤子」

「!!？」

突如背後に現れた気配に思わず振り向いて拳を構える。

「ほう、あの一瞬で身構えるまでするか……想像以上に育てたようだな立花」

「オヤジ……?」

「紹介する、今からお前の師匠となる……ヒューム・ヘルシングだ」

ヒューム・ヘルシング、確か鉄心さんに聞いた事がある。鉄心さんの若かりし頃からのライバルであり鉄心さんと共に今もなお現役最強を争う人物であると。

「宜しく願います、ヒュームさん」

相手が俺の師となる人物であるならば敬意を払い接すべきだ、何より今は貪欲に学ぶべき時なのだから。

「ふむ、切り替えが早いな。なら明日までに荷物をまとめろ、俺と共に行動してもらおうぞ」

「はいー」

去りゆくヒュームさんに頭を下げる。その姿が見えなくなった頃に頭を上げ、由紀江

の方へと振り返る。

「と、言う事になってしまった」

「うう、せつかく仲良くなれたのに．．．寂しいです」

おおう、既に涙目だ。

「あ．．．じゃあ由紀江、約束だ」

「ふえ？」

ゆつくりと右手の小指をピツと差し出す。

「俺は後三年半、目一杯修行して限界まで強くなるつもりだ。だから．．．由紀江も三年半精一杯修行して．．．」

左手で由紀江の右手を取り、小指を絡める。

「三年半後に必ず会おう、お互いに『これだけ強くなったぞ、どうだ』って言えるように修行して」

「．．．はい！」

うん、やっぱり女の子の笑顔が一番だ。特に由紀江は可愛いんだから笑顔じゃないと。

—翌日—

由紀江や大成さんと別れを済ませた俺は今、ヒュームさんの運転する車に乗って

た。

「どこへ行くか？とは聞かないのか？」

「ヒュームさんともあるうお方が理由も無く俺を連れ回すと言う事は考えにくいと思いまして。ならば敢えて問いかけるのも失礼かと思っておりますので」

「成程な、少しはマシな赤子のようだ」

心なしか愉快そうにしているヒュームさん。

「まあ敢えて言うならば今は京都に向かっている」

「京都、ですか」

「ああ、先ずはお前を鍛える前にどれほど使えるかを見なければならぬからな」

それは道理だ、しかしそれと京都に行く事と何の関係が……

「今俺は九鬼財閥で執事をしているのだが……」

だから燕尾服なのか、まあ妙に威圧感たっぷりだが似合うと言えば似合う格好だ。

「先日、当主である帝様に隠し子がいた事が判明したのだ」

九鬼財閥の事は俺でも分かる、世界で指折りの企業と言うぐらいの知識だが……

「そしてテロリストがその隠し子の情報をどこからか仕入れ人質に取り九鬼に身代金を要求してきた」

「……まさか、とは思いますが」



「そのまさかだ、その奪還作戦にお前にも加わってもらおう」

「……俺の存在が足かせになるとは？」

「鉄心や立花が鍛えていたのだ、少なくとも下手な連中よりは使い物になると信じたいものだ」

少しプレッシャーだな、言ってしまったらここで俺が必要以上に足でまといになれば鉄心さんやオヤジをはじめとした川神院の指導者たちは何を教えているのだ、となつてしまふ。大恩ある川神院の名に傷を付けるような真似を避けたい……以上は今自分が持てる全てを駆使し与えられる任務を忠実にこなすしか無いのだろう。

「承知」

だが貴重な実戦経験を得るチャンスでもある、今まで戦う相手と言えば川神院の師範代たちに修行僧、百代、一子、小雪、それと街の不良たちぐらいだったからな。

ヒュームさんに連れられて来たのは長野の山奥、移動中に教えられた情報によれば中腹にある旧日本軍の研究施設を居城にしているらしい。当初は長野在中の従者部隊だけで対処しようと考えたらしいのだが実力者が一人いたらしく失敗、自分たちの手には負えないと判断したらしく応援を要請しそれに呼応し動いたのがヒュームさんをはじめとした日本在中の上位ナンバー陣だった。

「ヒュームさん、誰ですそのガキ」

「俺の弟子だ」

『は？』

メイド服の女性……相当腕が立ちそうな人の質問、そしてヒュームさんの答えにその場にいた他の従者部隊の人たちも固まった。うん、いろいろな意味で至極真実な反応だと俺は思う。

「冗談だろ？」

「俺が、冗談を言った事があるか？」

なんだろう、誰も口を開いていないのに「ない」と言う言葉が脳内に響いた気がした。「今回は正面の陽動部隊の一員として参加させる、あずみ、ステイシー、李で面倒を見やれ。俺は一度帝様の下へと戻る」

ヒュームさんが残像すら残さずその場から消えると三名の女性がこちらへと歩み寄ってくる。

「まあ仕方ねえ、アタイは忍足あずみ。九鬼家従者部隊序列11番だ」

と茶髪の、やたら目つきが悪いメイド。

「序列56番、李静初です」

黒髪短髪のメイド。

「序列57番のステイシー・コナーだ」

金髪ツインテールのメイド。……うん、『従者』部隊と言うだけあって全員メイドだ。

「秋山悠理です、宜しくお願いします」

まあとにもかくにも挨拶だ、丁寧な挨拶は信頼される第一歩……と全然礼儀正しくないオヤジと宇佐美さんが言っていたしな。

「おう、しつかしまあ本当なのか？ヒュームの弟子つーのは」

忍足さんの問いかけに無言で先ずは頷く。

「元々は川神院ですけどね、ただ暫し川神流から離れたところで己を鍛え直そうとしたら……オヤジの紹介でヒュームさんの弟子に」

「災難だったな」

「そうですね？」

世界最強に近い人物の教えを得られるのだ、確かに大変だろうがむしろ願ったりと言うところだ。

「さあおしゃべりはそこまでです」

一人の老執事がパン、と手を叩くと他の従者たちも集まってくる。全員で30名ほどだろうか……全員が並々ならぬ闘気を放っている、流石は世界の九鬼財閥誇る従者

部隊の精鋭と言ったところだろうか。

「正面の陽動部隊はとにかく派手に攻め込んで下さい、可能ならばそのまま押し込んで紋白様もんしろを確保しても構いません」

「あずみさん、あの人は？」

「序列三番のクラウディオ・ネエロ、今回の指揮官だ」

と言っている間にも作戦説明は続いていく。

「正面の陽動部隊の指揮は私が行います、潜入部隊はあずみ。貴女に任せますよ」

「はっ!!」

「では各自持ち場についてください」

との言葉にそれぞれ散っていく従者たち、の中を縫いクラウディオさんが歩み寄ってくる。

「初めまして、秋山悠理ですね？私は九鬼家従者部隊序列三番のクラウディオ・ネエロと申します」

「ご存知とは思いますが秋山悠理です」

「ヒュームから軽く話は聞きました、今回の任務は陽動です。なので……無理をしない程度に立ち回ってください」

「はっ」

一礼した後にクラウディオさんの後をついていく。

クラウディオさんの号令により開始されたこの作戦だが……現在超乱戦中です。どうやら事前の報告よりも相手側に数がいたらしく潜入部隊も迂闊に動けないため陽動部隊が更に派手な立ち回りをしなければならぬらしい。

「つらああつ!!」

川神院の修行僧たちを相手にするよりは大分楽と言えば楽だがそれでも気は抜けない、何分相手は銃を持っている者もいるのだ。クラウディオさんやステイシーさんがそういうのを率先して倒しているとはいえ気は抜けない。

「……っ」

一旦離脱し状況を見る、しかしよくもまあ20人で200人近くいた奴らを押し込めるものだ。

「なんでこんなところに子供がいるのかなあ?」

「!?!」

今まで感じ取れなかった気配に振り向く、全身黒で統一したスーツを身にまとう男。

「……成程ねえ、ただの子供じゃないんだ?」

思わず振り返りざまに構えを取ると男がニヤリと嗤う。

「ずーっと暇な相手ばっかりでさあ？君は……僕を退屈させないでくれよ？」

冷や汗が滴り落ちるほどのドス黒く澱んだ怖気を孕んだ闘気、鉄心さんやルー師範代、釈迦堂さんやオヤジのような度を超えた力はないだろう。だがそれでも今の自分には十二分に脅威足り得る実力者……おそらく『壁』は越えていないであろう相手、今の自分がどこにいるのか……

「川神流秋山悠理……参る」

試してやる——

## 第六話 発露

side 序列???番 ???

くっ!? 思った以上に数が多いな、クラウディオさんにステイシーさんがいるとは言え20対200ぐらいか? 十倍の戦力差は厳しいものがある。潜入部隊側のあずみさんや李さんがいればもう少しとも思うが・・・?

「アレは・・・」

確か秋山悠理だっただろうか、ヒュームさんが連れてきた少年が全身真っ黒な男と打ち合っている。

「——っ!?!」

戦慄を覚えた、これだけ離れていても感じられる怖気と寒気、恐れたら負けだとあずみさんが良く言っているがそうだと分かっているも足が震える。

同じようにあの気を受けてしまったのだろうか、従者部隊が数名とあちら側の者が何人もバタバタと泡を吹いて倒れていく。

「・・・なぜ・・・」

これだけ離れている自分たちですらこうなのだ、あの少年が受けている気は尋常では

ないだろう。なのに少年は恐れず立ち向かっていく。

「私は……」

情けない、見ていることしかできない自分が……そして思う、あの少年のように自分もと。

side 秋山悠理

強い……一撃一撃が確実に俺の急所を突きに来ている、今のところ防げてはいるがそれだけだ。反撃する隙間を見いだせないでいる。

「ハハハハハハハハハツ!! 楽しい! 楽しいなあ少年んつ!!」

まったくもって楽しくない、まだルー師範代や釈迦堂さん、オヤジにボコボコにされて負けてた頃の方が楽しかったように思える。

「ぐっ……」

徐々にさばききれなくなってきた、疲れか、もともとの実力差故かは分からない。だがなんとなく分かる……今の俺ではこいつには勝てない。

「っ!?!……っは……」

ほら見ろ、戦ってる最中に考え事なんてするから……

「んーん、今殺すのが実に惜しいよ少年。あと五年……いやせめて三年あったならもつ



ともつと戦いがいのあるいーい武術家になってただろうにねえ……」  
 ああ、ダメだ。まともに呼吸も出来なけりや視界まで霞んできた、少しづつ意識が薄れていく……

「でも今は今、君はここでTHE END……じゃあねえ♪」

振り下ろされた殺気塗れの抜き手、そして俺の意識は『ここで』途切れた……

side 黒条漆くろじょうしつ

あーあー、本当に惜しいなあ。もつと鍛錬積んでからならとつてもとつても面白い戦いができただろうに、いや今でも十分面白かったんだけどね？それでも仕事は仕事、例え子供だろうと『皆殺し』のオーダーが出ている以上遠慮も躊躇もないけどねえ……

「!?」  
 振り下ろしたボクの手が止められてる？意識、もうないはずだよな？

ミシッ

「!!?」

いやいやいや、ちよつと掴まれてるところが軋んで……

ボキッ

「つ!!!?」

っああああああああああっ!!?なんっ!?

「ぎゃあっ!」

何なんだこれ!? さっきまでの彼に握力だけで気で強化されたボクの体を破壊するだけのパワーなんか無かったはずだ!! だが現実として今ボクの左手は一瞬でぐしゃぐしゃにされてる。うわあ、骨まで突き出てるよ。

「何なのさ君は……」

というか……状況そのものの異常さに気づいてなかったけどさ……この気の奔流は少年、君のモノなわけ? ああ……ボクの見立ては間違っちゃいなかった、少年……確か秋山悠理って名乗ってたっけ? 彼は絶対に強くなる……そんな強くなった少年とは戦えそうにないなコレ、いつの間にかもうかたつぽの腕とかも折られてるし。ああ……本当に残念だ……

side 秋山悠理

眼を開けるとそこには白い天井、痛む体を起こせばそこが病院だという事が分かる。

「起きたか悠理」

声に反応すればいすに座ったヒュームさんがある。

「俺は……あの黒い奴と戦って……それで……」

「結果論は君の勝ちだよねえ」

「っ!？」

隣のベッドに居るのは間違いなくあの時の黒い男、しかし両腕にギプスを嵌めているが……

「ああコレ？君にへし折られたんだけど……その様子じゃあ覚えてないみたいだねえ」  
「俺……が？」

記憶にない、それに俺にそんなパワーがあるわけがない……百代じゃあるまいし。  
「それで黒条とやら、お前は悠理のその時の状態をどう見た？」

「うーん、説明は難しいんだよなあ……自己防衛本能と言う割にはあまりにも攻撃的すぎる、どちらかといえば自己生存本能とも言うべきかな？奥底に秘められた莫大な潜在能力の……それも一端が今回表に現れたって感じかな？」

「成程、道理で立花が時間をかけろと言うわけだ」

何やらヒュームさんが愉快そうに嗤う、しかし莫大な潜在能力？俺に？

「それは置いておくとして黒条漆、お前に選択肢は二つだ」

「んん？」

「怪我也完治せぬまま放り出されるか、怪我を完治させ九鬼に仕えるか」

「実質それ一択だよねえ？まあ……そろそろ腰落ち着きたいしね役職と待遇は？」

「当面は従者部隊の一員として働いてもらう事になる」

従者？この人が？・・・似合わねー

「ボクが従者？またまたご冗談を」

自分でも思っているらしい。

「安心しろ、俺と数人で代わる代わる付きつきりで従者のイロハを仕込んでやろう。

元々戦闘能力は高いのだから直ぐに序列も上がるだろう」

「あつはつはつはつは・・・マジですか？」

うん、俺も思うが黒条さんご愁傷様ってことで。

「さて、次はお前だ秋山悠理」

「はい」

「黒条からの攻撃による怪我はほぼない、黒条が浸透勁の使い手であつた事を感謝する

んだな」

浸透勁、体の内部に直接ダメージを与える厄介な代物と釈迦堂さんが確か言っていた

ような。

「来週から九鬼家従者部隊の見習いとして働いてもらう、俺の弟子になるとは言えタダ

飯ぐらいを置いておくつもりはない」

「はい」

「黒条も同行させて俺と共に世界各地を巡ってもらう、俺の人脈で様々な武芸者と対戦もさせる。わずかな鍛錬と多くの実戦でお前を育てる、だから意地でも食いついてこ  
う」

「はう」

ようやく修行だ、それに黒条さんが言うとおりに俺に莫大な潜在能力があるというならばいずれそれも使いこなせれば……

「んじゃあ改めてさ」

黒条さんがベッドから身を乗り出して。

「手えこんなんだから握手は出来ないけど……ボクは黒条漆だよ、宜しく」

「秋山悠理です、宜しく」

これが意外と付き合いの長くなる九鬼家の知り合いである黒条漆との出会いだった。

## 第七話 帰還

—2009年4月—九鬼家極東本部

ヒュームさんの弟子になり、本格的に鍛え始められてから三年半が経った。兄弟子とも言えるステイシーさんや同期の弟子である漆さん（従者部隊入隊後強制的に弟子入りさせられた）と共に切磋琢磨し今ではすっかり様々な従者たちから評価を得ていた……のだが。

「そろそろ期限だな、悠理」

「はい」

そう、三年半……黛家で世話になっていた時期を含めれば四年。戻るとした約束の時間が来てしまったのだ。

「お前は揚羽様に次ぐくらいに強くなった、俺がそのように鍛えた。胸を張って戻ると良い」

「はい……ヒュームさん、三年半……お世話になりました」

「ふん……」

なんだろう、心なしか照れているようにも見えるが……

「おお、悠理……そうか期限終了であつたな」

「英雄様」

九鬼英雄、九鬼家長男でありやや破天荒な性格ではあるが根本は快男児と言つた感じである。好きな人ができたと言う相談を受け相手が一子であつた事に驚きはしたが……まあ一子次第だろうと思つている。

「フハハハハツ、もう主従の間柄では無い。何より悠理には世話になつている、友として我のことを英雄、と呼ぶが良い」

「まだ、今日までは従者です故……明日からそう呼ばせていただきます」

「うむうむ、お前さえよければ川神学園卒業後は九鬼に来て欲しいものだな」

「そうですね……良き師と上司、先輩方に恵まれた良き職場だと思いますが……オヤジの事もあれば川神院の事もありません。今年一年考えて……その時に決めさせていただきます」

満足そうな笑顔を浮かべた英雄様が去つていくと今度は紋白様だ。九鬼紋白、俺が始めて従者部隊の人々と参加した作戦で救出目標となつた少女、この三年半はヒュームさんに付き従い仮専属と言うことでお仕えしてきた。

「おお悠理、もう行くのか？」

「はい紋様、短い期間ではありましたがお世話になりました」

「ううむ……悠理よ、お前さえよければ九鬼にこぬか？」

「英雄様にも同様のお誘いを受けましたが一年、考えさせていただきます」

同じように満足気な笑みを浮かべ紋様も去って行かれた。

「なんだ、もう行くのか」

「少し寂しくなりますね」

「なんだよー何時までもいりゃあいいじゃねえかー」

「君がいなくなると寂しいけど束縛はできないもんねえ」

すっかり馴染みになったあずみさん、李さん、ステイシーさん、漆さんが別れの挨拶に来てくれた。

「皆さんにも世話になりました」

「ま、アタイは同級生になるからいやでも顔合わせるんだけどな」

「えー、あずみさんが悠理君と同級生？テラワロス」

「漆い!!そこ直れえええ!!」

逃げ惑う漆さんとそれを追うあずみさん、こんな風景も日常となりつつあった。

「では、またいづれ」

「何時でも遊びに来てください、忙しくなければお相手致します」

「おう!ロツクにハンバーガーとコーラでもてなすぜ!!」



さあ、戻るとしようか・・・家族と仲間の下へと・・・

「ちよっ!? あずみさん、それマジで刺さる方!! 刺さる方だからあ!!」

「うるせえ!! 殺すつもりだから問題はねえ!!」

「大アリじゃーん!!」

・・・漆さんを救出してから帰ろう。

—川神院—

懐かしいな、川神院の門。かつてはここが家だった、毎日のようにおはようとここから出かけ、ただいまとここに帰ってきていた・・・それだけに感慨深い。

「ああ、すまない」

門前にいた修行僧に声をかける。

「はい」

「鉄心さんは今いるかな?」

「どのようなご用件でしょうか?」

「・・・秋山悠理が戻りました、とお伝え頂けたら分かるかと」

「?はあ・・・」

四年前には見なかった顔だ、と言う事は俺が川神院を離れてから入門してきた人だろう。まあ四年もあれば人の入れ替わりもあるだろうしなあ。

「悠理」

ああ、懐かしい声だ。そう思い視線を向ければ鉄心さんがオヤジとルー師範代、釈迦堂さんを伴ってそこにいた。

「総代、秋山悠理……ただいま戻りました」

「ふおふおお、大きくなったのう」

「何かがつちり鍛え上げられてね？あのじいどんな修行させたんだよ……」

「以前とは比べ物にならないくらいに鍛えたネ、どれほど成長したか楽しみだヨ」

「おおつ、俺も戦いてーなあ」

一様に俺の成長を喜んでいる反応でこちらとしても嬉しい。

「しかしヒュームを通じて話は聞いたが……川神院を出るのか」

「はい、確かに以前よりも強くはなりましたが……それでも今の俺は大分川神流から離れました。正直以前使えていた技も若干うろ覚えなものもありますし」

「あれ？お前川神流の鍛錬はしてなかったのか？」

「いや……仕事で忙しくて技の鍛錬とかほとんどできなくて……使用頻度が少ない方から順番に記憶から無くなつて……」

ちよつとオヤジが呆れ顔をしている。

「ですが……川神流の門下生であることに変わりはないと思つていますので何かあれ

ば声をかけてもらえれば、と思います」

「うむ、そのときは頼らせてもらおうかのう」

—島津寮—

岳人の母親で寮母でもある麗子さんに挨拶を済ませた俺はあてがわれた部屋で……  
「僕はクツキーって言うんだ、よろしくね」

ロボから挨拶をされてきました。しかし九鬼にいた頃に話は聞いたが本当にこんな高性能なのを作っていたとは……まあクツキーの話を聞けば元々は一子へのプレゼントだったらしいがクツキーはご奉仕ロボ、一子は日常生活そのものも鍛錬と言ったらしく

「じゃあ僕は廊下掃除をしているから何かあつたら呼んでね」

すいー、と部屋を出て行くクツキーを見送ってから荷解きを始める。

まずは衣類、李さんおすすすめすべらないギャグ百選（封印指定）、ヒュームさんからもらった標本、ステイシーさんからもらったアメリカ国旗ペナント、漆さんからもらった漆器……おかしいな、貰い物のほとんどが役にたたない。まあもらった漆器はどこぞの家宝よろしく飾っておくとして……他の物は押入れ下の収納スペースに押し込んでおこう。

「しかし……思ったよりも荷物は少なかつたな」

先ほどのよぶ……大事な貰い物たちを押し入れにぶち込んだら表に出してあるものがほとんど無い。数冊の本と漆器ぐらいなものだ。

『ただいまー!』

『あれ?クツキーお客さん?』

ああ、すんごい懐かしく感じるな。声からしたら翔一と大和、気を感じるに……京と……誰だこれ?知らない気配が……ん、更に気配がもう一つは……覚えがあるような無いような……まあ行けば分かるか。

「久しぶりだな」

side 直江大和

「久しぶりだな」

一瞬、時が止まった。この人だれ!?とも思ってたけれど俺たちに久しぶりなんて言う人は一人しかいない。

「うおおおおお!!!悠理いいいい!!!」

真っ先にキャップが反応して飛びついた!?

「ははは、俺は男に抱きつかれる趣味は無いからなー?」

「うわあああああ!!!」

全速力のキャップを掴んで投げるなんて芸当を出来る存在は数えるほどしか知らない、特に男性では……一人ぐらいだ。

「お帰り、兄さん」

「ただいま大和」

---

side 秋山悠理

しかし凄まじく動きが早い事であつという間に風間ファミリーが参集した、しかも外国人留学生のクリスと昔懐かしい由紀江の二人が参入と言うおまけ付きでだ。

「しかし、由紀江が川神に来ていてしかも風間ファミリーに入つていたとは……驚きだな」

「いえいえ、皆さん良くしてくれますので……」

「とうるか悠理ー！お前本当に修行してきたのか!?まゆまゆみたいな可愛い子と知り合いいなつてたし」

百代は昔からその気はあつたが女の子好きになつたようだ、そして強くなつた……以前よりも遙かに。

「投げ飛ばすなんて酷いぞう!!」

「お前は少し落ち着くことを覚えなさい」

翔一は恐ろしい事にほとんど変わらない、体は大きくなったけど中身はそのまんまだ。

「兄さんが戻ってきてくれたから助かるよ」

「お前には気苦労をかけたみたいだな」

大和は中二病が抜けて少し知的なイメージを持ったように思える。

「ま、兄貴がくれば少しは楽だろ」

「忠勝も苦労をかけたな」

忠勝はほとんど変わらないようでも何よりだ。

「お兄ちゃん、わふー」

一子は……なんだろう、以前より犬っぽくなってきている気がする。まあ気にするほどではないだろう。

「うえーい！お兄ちゃん！」

「小雪も元気そうでも何よりだ」

小雪もあの頃が嘘のように元気だ、少々エキセントリックになったが問題無いだろう。

「悠理君、お会いしたかったですよ」

「ああ、俺もだ」

冬馬はなんだろう……眼の暗さはなくなったがちよつとばかりおかしい気がする、人のふとももに手を伸ばしてくるし。

「気をつけろ、若は両刀使いに進化してるぞ」

「準は何故かハゲになっていた、しかし一番聞きたくない進化情報をよこされたな。」

「おひゃ」

「ああ」

京も以前とは比べるまでもないぐらいに元気なようだ、ちよつとばかり大和との距離が近い（物理的に）が問題は無いだろう。

「ふふーん♪どうだ、俺様ナイスガイになっただろう？」

「確かに、以前より筋肉がついたな。だが筋力トレーニング以外も行え、体幹が悪くなるぞ」

「岳人はあの頃のまま真つ直ぐパワータイプに育ったらしい、まあそれはそれで不安があるが……きつと問題は無いだろう。」

「で？何故卓也は女装しているんだ？」

「うう……せつかくだからって……」

卓也は……なぜだろう、女装姿が何故だか似合う……そして岳人と冬馬が……うん、俺は何も見なかった事にしよう。

「お初にお目にかかる、クリステイアーネ・フリードリヒだ」

「秋山悠理だ、よろしくクリス嬢」

そして新人のクリスはまっすぐな眼をしている、どちらかといえば一子に近しいものを感じる。

「悠理さんにまたお会い出来るなんて・・・」

「約束通りまた会えた、と言う事で」

もう一人の新人由紀江は以前会った時よりも女らしく育っていた、そして闘気も充実している、確実にあの頃よりも強くなっている。

「ユウ兄、かなり落ち着いた感じになったよね」

「色々と経験してきたからな」

「さー!!色々話を聞かせてもらおうぜ!!」

これだよ、この雰囲気。ああ、戻ってきたんだなと実感する瞬間だ――



## 第八話 Sの序章

転入してから一週間が経つ、転入当初こそは騒がれたものの風間ファミリーに加え英雄と知り合いと言う事であつという間に川神学園に馴染んでしまった。そんなある日の事……全校朝礼での鉄心さんの一言だ。

「今週末、福岡の天神館と学年対抗の200対200の団体戦を行う事になった。これを『東西交流戦』とし各々全力を尽くし臨んでもらいたい」

当然ながら、学園全体が騒然とする。

嬉々として着手する者……こちらは百代や翔一、一子、岳人が主である。

目標を設け挑む者……由紀江や武蔵小杉と言った生徒が主となる。

正直どうでも良いと思う者……京や大串スグルをはじめとした者が主である。

そして俺はと言えば……

—川神学園屋上—

英雄やあずみさん、ヒュームさん、クラウディオさんと言ったメンツに囲まれています。俺何か悪い事でもしただろうか……

「いえいえ、悠理にはお願いがあつて参りました」

「正確にはお前への課題、だがな」

二人の言葉に内心ホツとしている、俺が何かしでかしたので無ければ問題はあんまりない。

「先ずは一つ、今週末の東西交流戦に関してです」

クラウディオさんが一歩前に進みながら話を始める。

「今回の東西交流戦ですが・・・諸事情によりあずみが参加できません」

「・・・大きな案件でもあつたんですか？」

「ええ、丁度東西交流戦の三日目に帝様が霧夜コーポレーションの社長と会合を行います。その際、テロリストの一団がこの場を狙っていると言う情報が入りました」

「成程、ヒュームさんやゾズマさんは？」

「俺は紋様の護衛でイギリスに飛ばねばならん、ゾズマもアフリカでテログループの相手で忙しいそうだ」

となれば残る戦力はあずみさん、クラウディオさん、九位の鷲見さん、十一位のチェさんぐらいだろうか・・・李さんやステイシーさん、漆さんもいるだろうが本部の戦力も必要となればあずみさんとクラウディオさんの二人体制が最善なのだろう。

「俺が当日は英雄の護衛を、と言う事ですか」

「うむ、従者部隊内の戦力を参加させられぬ以上は外部の・・・学園生徒となるわけだ、

その場合最も信頼出来る同学年はお前しかいなかったのだ」

「……分かりました、お引き受けします」

満足そうに微笑むクラウディオさんが一歩下がると入れ替わりにヒュームさんが前へと進み出る。

「では続けて俺からの話だ」

なんだろう、嫌な予感がする。

「来週頭から紋様を含め九鬼の関係者が七名、川神学園に転入する事になっている」

「……それはまた」

何をする気なのかは知らないが警戒するに越したことは無い、か。

「それに際して二年にも従者部隊から一名送り込む事になってな、それでだ」

さつき感じた嫌な予感が現実味を帯び始める。

「まさかとは思いますが……」

「そのまさかだ、悠理……その従者の師となり武術と従者としての仕事を教えてやれ」

「お言葉ですが俺は既に従者部隊ではありません、その俺が教育を施す事に関して不満などが出る可能性があるのでは？」

「問題はあるまい、帝様にも許可は得た。それにお前には前歴がある、誰も異論を挟む余地などあるまい？なあ？『序列176番』」

序列176番・・・そう、三年半と言う期間で俺が九鬼で成した功績に対する評価がそれだった。九鬼を離れる時に勿論序列も返上したのだが帝様から「持つてて困るわけじゃねえし？他に就職が決まるまでは持つとけよ」と言われ止むなく現状も従者部隊の序列に俺の名が残ったままなのだ。

「・・・ならば仰せのままに」

「それとその従者は島津寮に入る事になる、少々世俗や常識に疎い事もある・・・そのへんも頼むぞ」

「・・・御意に」

矢張りそういうことか、おそらくはその一般常識に疎いのが格別なのだろう。だから押し付けてきた、まったくもって迷惑なことではあるが九鬼には恩義が多々ある以上断る事はできない・・・できない。

「フハハハハッ！何はともあれ先ずは週末の交流戦、頼むぞ!!」

「ああ・・・過不足無く職務を成そう」

—翌日—川神学園会議室—

差し迫った東西交流戦に向けて二年生の首脳陣が一堂に集まり作戦会議に勤しんでいた。参加メンバーは英雄、俺、翔一、大和、冬馬、忠勝、準、マルギツテのを中心とした十数名だ。

「先ずは呼びかけに応じてくれて感謝する、S組の方々」

「フハハハハッ！友の呼びかけには応じねばなるまい!!」

英雄が何時ものノリで応じてくる。

「要件は週末の東西交流戦に関して、だ」

「成程、わざわざこのメンバーを呼び出すと言う事は……」

「相手方の詳細情報が手に入った」

冬馬が切り出してくれると話が進めやすくて助かる。

「結論から言えば現状の、クラス間が仲違いしている状況で勝てる相手ではない……  
故に俺をF組側の特使としてS組に一時遺恨を捨て手を繋ぐ事を願いたい」

「うむ、悠理がそういうのであればそうなのだろうな」

「例えどのような敵だとしても全力で当たるのは当然だと知りなさい」

マルギッテ・エーベルバッハ、クリスの姉替わりらしく態度はやたらめったら高圧的だが面倒見が良い。

「では詳細を説明する」

備え付けのホワイトボードに現状掴めている情報を書き出していく。

「先ずは敵の特記戦力からだが……あちら側の主力となるのは西方十勇士と呼ばれる者たちだ」

「西方十勇士？」

「ああ、中学時代に西で武と知に優れた学生十名が天神館学園に集まった。それでその十名を総称してそう呼ぶそうだ」

翔一が目を輝かせている、まあ大方対抗してやるぜ!!みたいなノリだとは思うんだが……

「が、こちらとて戦力的に劣るわけではない。というわけで基本戦術は敵将の各個撃破を提唱する」

「ふむ、確かに有効な戦術ですが……部隊編成はどうするのですか？」

マルギツテからの質問を受けホワイトボードに大まかな編成を書きながら言葉を続ける。

「勝率を高めるためにFとSの混成部隊とする」

英雄、冬馬、準、マルギツテが頷いたのを確認するとホワイトボードに視線を戻す。

「第一防衛部隊隊長、源忠勝……第二防衛部隊隊長、風間翔一……第三防衛部隊隊長、島津岳人」

基本万能型で目端が利く忠勝に軽業師も顔負けな身軽さの翔一、そしてパワーなら二年最強クラスの岳人が地の利を活かして戦えばかなり堅牢な拠点となるはずだ。

「続けて敵将撃破に動く遊撃部隊……第一部隊、クリステイアーネ・フリードリヒと

井上準」

少し前にクリスに将棋のルールを教え、やらせてみたのだがかなりのものであった。甘えん坊でアホっ子と言うイメージがあつたが軍人の娘なだけはあるようだ。

そこに補佐役に適任な準を副官として付けければ戦場を縦横無尽に駆ける精鋭部隊の出来上がりだ。

「第二部隊、川神一子とマルギツテ・エーベルバッハ、椎名京」

先ず一対一ならかなり強い一子と現役軍人のマルギツテ、そして狙撃担当の京で隙のない布陣を組む。天神館とて馬鹿ではない、きつと十勇士のうち何人かを組み合わせ侵攻させる事も考えられる。それに対応出来るメンバーがこれだ。

「作戦の要となる参謀本部、直江大和、葵冬馬の両名に護衛として榊原小雪を配属する」  
大和と冬馬には全域を見渡せる場所に陣取ってもらい随時状況を確認しながら能動的な指示を出してもらおう。一般生徒だけでは十勇士の誰かが突貫してきた時に応戦しきれない可能性もあるため小雪を、小雪ならば十勇士が来たとしても五分以上の戦いをしてくれるだろう。

「そして本陣、総大将の英雄、その護衛として俺が付く。備えとして不死川も駐屯させる」

「本音は？」

「下手に前線に出すと指示を無視されそうだ」

不死川心、日本三大名家である不死川家の跡取り娘であり典型的な家柄至上主義。多分こちらが指示を出しても無視される可能性があるがあるので下手に動かすよりは手元に置いていた方が賢明だ。同じ事を思ったのだろうか大和と冬馬も納得の表情だ。

「これは学園の名を賭けた大戦ぞ」

中央に座す英雄が、口を開いた。

「学び舎の名を高め、己が名を西にまで知らしめる好機でもある」

そこまで大きい声ではない、だが周囲の喧騒などないかのようにハッキリと聞こえる。

「各人奮起し諸事万端に挑め」

『応!!』

これだ、英雄をはじめとした九鬼家の人たちが持つ人を従わせる覇気。誰もが持ち得るものではない、俺が知っている限りでも霧夜のご令嬢がそれを持っているぐらいだろうか。

「悠理よ、勝てると思うか？」

「愚問だ」

皆が会議室を出る中、背後からの英雄の声に自然と笑みを浮かべる。



「勝つ、それだけだろう」

「・・・うむ、そうだな」

—島津寮—

さてさて、会議も終わり京、クリス、由紀江と合流し寮へと戻ってきたら・・・

「お帰りなさいませ」

メイドさんが出迎えてきました。

「お初にお目にかかります皆様、九鬼家従者部隊序列995番・・・レベツカ・リーエ

ンと申します」

「・・・ヒュームさんの言っていた娘か」

「と言う事は・・・貴方が秋山悠理様、ですな？」

この娘が・・・ねえ。戦闘技術はともかく見たところステイシーさんなんかよりも基本は出来てそうだし俺が教える事がどれほどあるかが疑問なんだが・・・

「ああ、確かに俺が秋山悠理だが・・・」

「本日より悠理様の下で諸事万端学んで来るようにとヒューム様より仰せつかって参りました」

「諸事万端って・・・ん？」

ふとケータイが鳴ったので画面を見ると「ヒュームさん」の文字が画面に表記されて

いた。

「もしもし」

『悠理か、そろそろレベルカとも顔合わせをした頃だと思つてな』

なんだろう、壁を超えた人たちはたまにこういうことを言う。まるで千里眼でも持っているかのような。

「ええ、それで・・・戦闘技術以外の何を教えろと？ 少なくともステイシーさんなんかよりは敬語もしっかりしているように見えるのですが？」

『敬語は生来からの性分のようなものらしい、ただ貧民街育ちでな・・・少し一般常識、教養に疎いところがあるのでそこを重点的に教え込んでやってやれ』

「そういう事ですか、戦闘技術の方はどうでしょう？」

『基礎は叩き込んである、お前の方で適宜技術的指導を行いつつ基礎鍛錬を怠らないようにしておけ』

それから二言、三言交わしてから電話を切り再び視線をレベルカへと向ける。

「まあ俺もまだまだ若輩だ、可能な限りで教えていくが至らぬ点があれば指摘して欲しい」

「はい」

「川神学園に編入してくるんだっただな？ ならば二年になってから授業で行った内容全て

を叩き込むからな」

「はい！」

まったく、忙しくなりそうだぞ……これは。

## 第九話 東西交流戦く前編く

一年、三年、二年の順番で三日かけて行われる東西交流戦。既に最初の二日だけで悲喜交々なストーリーが生まれた。

初日、一年生の部。総大将武蔵小杉の命令で意気込んで敵本陣に奇襲をかけに向かった由紀江だったが何故か突出し始めた武蔵小杉がものの数分で撃破され活躍する暇もなく終戦、のちに「小杉散華」と呼ばれる事になった。

二日目、三年生の部。百代対策として200人が一体の巨人に変化する奥義『天神合体』を用いて戦いに望んだ天神館側であったが百代の放つ『星殺し』……まあつまり極太レーザーの前に撃沈、その後は消化試合同然となりのちにこちらは「MOMOMOY 無双」と呼ばれる。

そして三日目、この戦いの勝敗を決す二年生の部が今まさに開戦の刻を待ち構えていた――

――川神学園側本陣――

既に全員が配置に就いたのを確認すると俺は英雄の傍らで待機していた。

「フハハハハッ、悠理よ。レベッカの配置はどうしたのだ？」

「単独で遊軍扱いに、下手に部隊に組み込むよりは良いかと」

何より手合わせした感じではかなり強そうだったし、とりあえず「隙あらば敵将を討て、それ以外は自由に」とだけオーダーを下して後は何の指示も出していない。どれぐらいの自己判断力と行動力があるかを見る一つのテストだ。

「さて……序盤で十勇士のうち何人を討てるかが問題となるな」

「ふむ、悠理もそう見るか」

「当然だろう、中核を成すのが十勇士ならば最低半数討てれば勝負の天秤はこちらに傾く」

そのためには要所防衛、遊撃の将たちと何枚か仕込んだジョーカーが機能することを期待するしかない。

『開戦じゃあつ!!!』

鉄心さんの開戦宣言と共に前線から大音量の怒号が巻き起こる、初っ端から正面衝突したのだろう。

「悠理、ここまで敵が抜けてくる可能性はあるか？」

「突破力があるのが一人いるようだし忍もいる、本来あずみさんの役目なんだろうが……今日は俺が代理と言う事でお相手しますよ……なあ？忍」

俺が視線を向けるのは真上、何も見えない漆黒の闇。しかしはつきりと殺気と気配を

感じる。

「真つ向からも一人ですが・・・そちらは不死川さんがなんとかするでしょうよ。俺は上を叩きます」

「任せたぞ悠理」

「御意」

ぐつ、と足に力を込め力任せに跳躍する。

姿が見えた、まあわかりやすいぐらいに忍のような格好をしている。

「何奴!?!」

「川神学園、秋山悠理・・・参る」

降下してくる忍、特徴からして十勇士の鉢屋だろう。まあとりあえず・・・

「そのまま落下されると困るのでね・・・ぶつ飛べ!!」

「ぐむうつ!?!」

先ずは空中で蹴りを一つ、これで落下地点が動いた。少なくとも落下のドサクサで大将が・・・なんて事にはならない。が・・・大分距離を空けすぎた、俺は百代みたくに空中で自在に動けるわけではないのでこのまま落下するしか・・・

「これでも喰らえ!!」

「っ!?!」

ヤバイな、そう言えば忍には飛び道具があるのを忘れていた。クナイに手裏剣の乱舞、だが……見慣れた光景だ。なにせ鉢屋よりも長く生きたあの人と戦っていたのだから……な。

「当たるか!!」

「何っ!?!」

親父のマフラーを一本借りてきていた、首には巻かずに腰に巻きつけていたモノに気を送り込み硬化させる。布槍術と呼ばれる中国武術の技法……を使つて一本残らず撃ち落としたところで俺も鉢屋も着地する。丁度味方部隊のど真ん中か……

「困うだけでいい……こいつは俺が討つ!!」

その言葉に味方が俺と鉢屋を囲い円を描く、とあちらの方で不死川と恰幅の良い女子が戦っているのが見えた。

「余所見をする余裕があるのか?」

「分身か」

鉢屋がいつの間にか五人に増えている、周囲の味方もざわめき始める。まあそりや驚くだろうが……普通は。

「覚悟っ!! 貴様さえ討てばロクな護衛はいないはずだ!!」

「ああ、その読みは当たりだ。客観的に俺より強い奴はここにはいない」

ゆつくりと眼を閉じる、そう俺が負ければそれまでだ……『負ければ』だがな。

「だがな鉢屋、お前は奇襲を見破られた時点で終いだつたな……」

side 鉢屋

「だがな鉢屋、お前は奇襲を見破られた時点で終いだつたな……」

それがどうした、忍として直接戦闘は鍛えている。川神百代や剣聖の娘と言った特記戦力がない以上は俺が貴様と総大将を討てば全て……

!!!?

何が起きている? どうして『目の前にこの男がいる?』おかしい、さつきまで30mは離れていたというのに! しかも分身が全て消されて……

「ジェノサイド……」

振り上げられた脚、見た瞬間にこれを喰らえばマズイと言うのは分かった。わかつているのに……本能が告げている、これを避ける事はできないと……そして……

「チエーンソー!!」

俺はここで負けるのだと、ハッキリ認識した瞬間に俺の意識は途切れた……



side 秋山悠理

ヒュームさんに教えられて以来始めて使ったが上手くいくものだな、まああの人が見ていたら「まだまだだな」って言われて終わりなんだろうけれど。

「フハハハハッ！まさかヒュームの技を使うとはな!!」

「相手も手練だったからな、確実に仕留めた方が良いと考えたまでだ」

忍との直接戦闘の場合、長期戦は避けなければならぬ。というのもあずみさんによる対忍講義で教えられた事なのだが忍にはあずみさんのように罠を駆使する者もいれば体のいたるところに毒を隠し持ち長期戦に持ち込んで仕留めるタイプも存在するらしいという情報を得ていた。

鉢屋がどのタイプかは分からないが可能性が少しでもある以上は速攻で倒した方が良く判断したのだ。

「いっぽーん!!敵将、此方が討ち取ったのじゃあ!!」

その声に釣られてそちらを見れば地面に叩きつけられのびたままの敵将が横たわっている。

「まあ重量級は投げに弱いというしな」

「フハハハハッ!!相性が良かったな不死川!!」

「素直に此方を褒めぬかー!!」

俺と英雄の言葉に涙目の不死川、ちよつとからかい過ぎたかと思えばその頭を撫でる。

「まあとは言え敵将を討つたのは確かだ、よくやってくれた」

「によわっ!?!」

なんだろう、顔が真っ赤になっているが・・・まあ良い。

「さて・・・そろそろ押し込みに行こう。英雄、すまないが本営を離れさせてもらおうぞ」  
「うむ、流石に将を二人も失ったとあつては迂闊に本陣攻めなどすまい。思う存分に暴れて参れ!!」

「承った」

さてさて、現状入ってきた報告と照らし合わせよう。本営で撃破したのが鉢屋と：：おそらく宇喜多だろう、そしてマルギツテが十勇士の大友を、京が毛利を、詳細は伏せられているが羽黒が龍造寺を、準が尼子を討ち取ったと言う情報が入ってきた。大村が持病の発作で倒れたらしいので残るは石田、島、長宗我部の三名のみ。

「・・・あれは・・・」

遠くの方で火だるまになった大男が打ち上げられた、それを追って飛び上がったのは・・・

「小雪とレベツカか・・・あ、蹴り落とされた」

多分、打ち上げられたのは長宗我部だろう。火だるまになっていた理由は分からないが小雪とレベツカのツープラトンキックで海の方へと叩き落とされたのが見えた。小雪の脚力が凄いのは知っていたがレベツカもどっこいどっこいじゃないか。

「あの娘のどこをどう鍛えろと？」

自然な疑問だが技術的なものかも知れないしあまり気にしないようにしよう。

「さあ・・・行こうか」

ならば狙うは大将首、将一人討つただけでも十分だとは思うのだが後からヒュームさんにどやされる気がするので・・・ここはもうひと踏ん張りで行きますか。

## 第十話 東西交流戦〜後編〜

「さて、総大将はどこだろう？さつきメールで本陣は総大将不在と言う連絡は来たが……」

「……この音は……」

「甲高い笛の音、間違いない一子を呼び出す笛だ。つまりは……」

「あっちだな？」

この音が道しるべだ、工場内の設備の配置と音の反響角度を計算して……

そうして俺が現場にたどり着いた時、目の前に広がっていた光景は想像以上だった。

「ピンチみたいだな大和」

「兄さん!? ナイスタイミング!!」

「フハハハハッ!!! また俺の出世の礎が増えたか!？」

「確か……資料の写真では黒髪だったはずの石田三郎が金髪になってる、具体的にサ○ヤ人みたいな感じに。」

「まあ良い、下がってろ大和」

「一人で俺の相手をするか！光龍覚醒した俺に勝てる奴など川神百代ぐらいなものよ！！」

あちらでは一子が・・・同級生かどうか怪しい男と薙刀と槍で打ち合っている。しかし百代ぐらいしか相手にならない・・・とは大きく出たものだ。

「ならば川神流の秋山悠理として、お相手しよう」

「行くぞ雑兵！！イナズマブレイド！！」

電撃に変換した気をまとった上段からの切り下ろしか、かなり速いし鋭い一撃だ・・・が。

「遅い！！」

「なんだと！！？」

石田はかなりの使い手なのだろう、少なくとも壁手前の者たちではかなりの強さだ。だが俺のかつての鍛錬相手は剣聖黨十一段とその娘である由紀江なのだ、速く鋭いだけの斬撃など見切るのには簡単だ。

「川神流・・・無双正拳突き！！」

「ぐっ・・・があああああっ！！」

避ければまだ可能性はあったのに真つ向からガードするとか・・・もの見事に吹き飛んでいった。

「きつ……さまあ……」

「驚いたな、まだ意識があるか」

ガードをぶち破つてクリーンヒットさせたのに意識があるとか……やっぱり腕力低めなのかな俺は。

「それ、だけの力が……あつて。なぜ……無名のまま、で……」

「俺は俺の我を通すために強くなった、それだけだ。必要以上に名を広めるつもりはない」

俺の言葉を聞いた石田が、そのまま意識を失つた。……でそれで動揺した敵将を一子が見事に撃破、したところで拍手の音。

「二人ともすごく強いな、義経は感心した。……これぐらい感心した!」

ポニーテールの黒髪少女がめいっばい手を広げて眼を輝かせている。

「えつと……」

「色々と聞きたい事もあるが……どこのどちら様だ」

「自己紹介をしていかなかったな、義経は源義経だ」

源義経とはまた……あー、そう言えばヒュームさんたちが近々武士道プランと言う計画を発動すると言っていたがそれ関連かな？

「初めましてだな、秋山悠理だ」

「！キミが秋山君か！」

「知っていたか」

「うん、ヒュームさんやクラウディオさん、マーブルさんから良く聞かされていた！」

「すごいメンバーから聞かされたものだ、どんな話をどんな評価で話されたかが気になるが。」

「そうか、とりあえず・・・義経と一子で勝鬨を上げてくれ」

「ええ!?だが義経は戦っていないし・・・」

「俺はこういうの苦手だからな、お願いだ」

「少しだけ考える仕事をした義経が領き、声を上げる。」

「敵将!!全て打ち倒したぞ!!」

「勝鬨を上げろー!!」

『うおおおおおおおお!!!!』

今日の前には西の大將石田が仁王立ちしている。

「おいお前、此度は俺の完敗だった」

「なんでだろう、本来は「悔しいが俺の負けだ」みたいなセリフなのに凄まじく尊大に見える、つてか尊大。」

「だが次は負けん！覚えておけ!!」

と、指差し叫びながら身を翻して去っていく。なんだったんだあれは……

「さて、次は俺の番だな」

背後からのヒュームさんの声に背筋が凍り付く、予想だにしない来訪……いや正直気づいていましたともあの人を殺せるような鋭く突き刺してくる視線。一挙手一投足を逃さず観察されていた事なんてとつくに分かっていましたとも、わかっけて現実逃避したんです。

「先ずは今日の事だ」

ああ、やっぱりそれですよね。

「忍の暗器に気づかず射出させたばかりか分身する暇すら与えるとはな」

倒すなら暗器も出させず分身もさせずに倒せ、と。初見の相手だったし防衛優先だったから……なんて言い訳は絶対に通じないだろう。

「が……俺の教えた技はしっかり鍛錬していたようだな、見事だ」

「……え？」

聞き間違いだろうか、今ヒュームさんが褒めた気がする。明日は隕石でも降ってくるんだらうか。

「おい、失礼な事を考えたな？」



「まさか、そんな事はありません」

「やばいやばい、こんなところで蹴られたくはない。」

「まあ良い、義経には会ったな？」

「はい」

「明日からあの義経と紋様と俺を加えた六人が転入する事になる」

「……今聞いてはいけない事を聞いてしまった気はするが聞かなかつた事にしよう。それでだ、学園にいる間は必ず従者部隊の誰かが紋様に付いているが場合によつては力量に不安のある者がつくかも知れない。そのときはお前がお守りしろ」

「命令形だ、有無を言わずと言うことだろうか。まあ紋白様とは仲良いしいいけど。」

「承知、ご用件はそれだけですか？」

「もう一つある」

「ああ、あるんですねもう一つ。」

「義経を含めたクローン四人の事だ」

「はい」

「特に義経だが源義経のクローンであるという事に重責を感じ気を常に張り詰めており、それがあらぬ失敗をうむのでは無いか、と紋様が懸念しておられる」

「うんうん、まあ第一印象で生真面目だなあと思つたからそれもそうだろう。」

「出来る限りで構わん、フォローしてやれ」

「他三人はいいのか？」

「他三人はそこまで気を張っていない、義経だけなのだ」

「分かりました、学友としてフォローしますよ」

その言葉に満足したのか身を翻し歩き出すヒューム……が少し行つてから振り返る。

「ああそうだ、明日の放課後。九鬼極東本部まで来い……必ずだ」

その言葉と共に姿が消えたのを見れば先ずはため息を一つ。

「何をさせる気だあの人は」

最近、従者部隊時代の癖からやや丁寧な言葉を使っていたのに思わず地が出た。

「……まあなるようにしかならないか……」

もはや不安しか感じないなら開き直つてしまえ。それが結論だった。